

医学系留学生のための包括的日本語教育

－徳島大学国際センターの取り組み－

福岡 佑子 ・ 橋本 智 ・ 秋永 千恵

FUKUOKA Yuko ・ HASHIMOTO Satoshi ・ AKINAGA Chie

徳島大学国際センター

要旨：徳島大学国際センターの2018年度後期全学日本語コースでは、医学系留学生を対象に医学日本語・生活日本語を組み合わせた授業を行った。医学日本語では、体や病気に関する一般的な表現や臨床で使う表現などを扱った。これまでの文法積み上げ式の「文型シラバス」ではなく、1回完結型の「場面・機能シラバス」を用い、初級から中級以上の日本語学習者が同じクラスで学習するカリキュラムを実施した。受講学生からの評価は高く、コース終了時の評価も良かったが、基礎的な日本語を体系的に学習することはできず、学生の日本語能力が向上したのかといった疑問が残る。今後は学生のニーズと環境にあったカリキュラムと教材作成を検討していきたい。

キーワード：医学日本語、生活日本語、教材開発

1. はじめに

2008年に策定された「留学生30万人計画」に基づき、大学などの教育機関による外国人留学生（以下「留学生」）の受け入れが進んでいる。徳島大学でも、グローバル化のための取り組みとして世界各国・各地域からの留学生を受け入れており、2018年度には留学生数が264名に上っている（5月1日時点の在籍者数）。異なる文化的背景を持つ留学生を受け入れるにあたり、大学では生活面から学習環境まで各部局による総合的支援が重要となる。その中でも日本語教育は留学生受け入れ環境の最も基本的なものである。留学生の日本での留学生生活は大学内だけで完結するものではなく、精神的に安定して充実した留学生生活を送るには日本・徳島の文化や習慣に触れ、地域の人々との日常的な交流が欠かせない。そのためには、日本語の習得は必要不可欠であり、国際センターでは留学生に対する様々な日本語教育支援を行っている。

国際センターが開講している日本語コースのひとつに、全学日本語コースがある。全学日本語コースでは、受講生が開講前のプレースメントテストにより日本語レベルに合ったクラス（A1からD1までの7レベル）に分かれて日本語を学ぶ。受講生が専門の勉強・研究と日本語学習を並行して行うことを想定して、いずれのレベルも1回90分の授業を週2回としている。対象者は、徳島大学に在籍する留学生・研究者ならびに外国人教職員とその家族で、総合科学部・理工学部・生物資源産業学部がある常三島キャンパス、医学部・歯学

部・薬学部がある蔵本キャンパスで開講している。

2. 全学日本語コースの課題

近年の全学日本語コースの課題として、蔵本キャンパスでの受講者数の減少が挙げられる（表1参照）。

表1. 徳島大学留学生数及び全学日本語コース受講者数推移

年度	2013	2014	2015	2016	2017
留学生数（全学）	218	208	211	235	264
留学生数（蔵本）	66	62	60	53	51
全学日本語コース 受講者数（全学）	129	107	88	130	126
全学日本語コース 受講者数（蔵本）	77	66	48	39	25

※全学留学生数は各年度5月1日時点、蔵本留学生数は2月1日時点

※全学日本語コース受講者数はいずれも前・後期を合わせた人数

蔵本キャンパスに在籍する留学生数が微減していることを考慮しても、日本語を継続して学ぶ留学生が以前と比較して減少しているのは明らかである。前年度に蔵本キャンパスでの全学日本語コースを担当した教員からは、文字修得の困難さから授業の進度が思うようにいかず、受講生が学期途中で挫折したり次のレベルへ上がれないという状況が続いていると報告があった。また、実験や実習の関係で何度かクラスを欠席せざるを得ない留学生も多く、文型積み上げ式に進んでいく初中級のクラスについていくことが難しくなるケースも度々見受けられた。さらに、蔵本キャンパスに在籍する留学生の多くは大学院生であり、所属する研究室での使用言語は英語である

ことが多い。高いレベルの日本語が以前ほど留学生に求められなくなったことも、留学生の日本語学習に対するニーズの変化に繋がっていると考えられる。

3. 2018 年度後期全学日本語コースの取り組み

2018 年度後期には、蔵本キャンパスの医学系留学生のニーズにより近い日本語コースの提供を目指して、医学日本語と日常生活場面に即した日本語を扱う M1 クラスを新たに設けた。M1 クラスは、生活日本語と医学日本語の 2 部構成とし、テキストはそれぞれ『にほんごこれだけ！ 1』（ココ出版）、「留学生と日本人学生のための医学系語彙と表現集」（徳島大学国際センター）を使用した。生活日本語では、日常に即したトピックについての情報交換を通して、日常生活で留学生が頻繁に遭遇する場面を乗り切るための基礎的な日本語会話能力を身につけることを目指した。医学日本語では、体・病気・薬・病院・家族に関する一般的な表現から、呼吸器・消化器・精神科・産婦人科・歯科などの専門的な語彙、臨床で使う表現を扱った。「留学生と日本人学生のための医学系語彙と表現集」は、医学系留学生と医学系日本人学生の共同学習教材として、2017 年度後期に国際センターで作成したものを改訂し、各トピックのイラストと、単語や学習項目が日本語（ルビ付き、ローマ字表記）と英語で表記されている（付録参照）。ローマ字表記と英語訳を含む教材を使用することで、日本語未習者から上級者まで受講可能なクラスを目指した。また、各授業の内容を 1 回完結型にすることで、実験や実習ですべての授業に参加できない場合にも受講し続けられるよう配慮した。文字学習の負担軽減のため宿題は出さなかった。

M1 クラスは、2018 年 10 月 22 日から 2019 年 1 月 25 日の間に、90 分授業を 2 名の担当教師が月曜日と金曜日の週 2 回、計 18 回行った。受講生は計 7 名で、国の内訳はモンゴル 1 名、中国 5 名、インドネシア 1 名だった。受講生の日本語レベルは、全学日本語コースの A1 が終了した初級レベルから、日本語能力試験 N1 合格者まで様々だった。受講生には初回授業の際に M1 クラスのシラバスを配付し、受講生たちが M1 クラスに期待することを記述してもらった。受講生の多くは医学に関する日本語を学びたいと回答し、中には所属先の日本語での会議内容がわかるようになりたい、研究論文に必要な日本語を学びたいという声

もあった。

医学日本語については、授業を進めながら担当教師の判断で適宜追加教材を使用した。病状を表現するオノマトペ表現や、多言語医療問診票、服薬について、さらに臨床検査技師を特集した「プロフェッショナル仕事の流儀」DVD 視聴など、担当のトピックに合わせて各自が追加教材を準備し、クラスで配布した資料はクラスファイルを通して教師間で共有した。

学期末評価では、最終週の授業で 2 つの課題を出した。1 つは医学用語の口頭試験、もう一つは生活日本語で扱ったトピックのうち 1 つを選んで短い口頭発表を行うというものだった。

3. 受講生からのフィードバックと考察

コース終了直前に、M1 クラスの全受講生を対象に紙媒体のアンケートを実施した。学期途中で受講を取りやめた中国人留学生 1 名を除く計 6 名がアンケートに回答した。

M1 クラスに対する総合評価では、6 名中 3 名が「とても満足」、残りの 3 名が「満足」と答えた。理由として、「クラスの雰囲気良く、たくさん話せたことで会話能力が向上した」「知らなかった単語をたくさん学んだ。みんなと話して日本語での会話が上達した」「いろいろな日本語を勉強しただけでなく、新しい友達ができ」という記述がみられた。記述の通り、学期を通して受講生全員が意欲的に授業に取り組み、受講生同士が意見を交わし合う場面も多くあった。感想からは、受講生たちが日本語アウトプットの場を強く求めていることがわかった。また、日本語初級レベルの受講生は「授業の内容は専門の研究と日常生活場面の両方で使えるものだった。教師と受講生の対話をベースにした進め方は良かったが、ときどき早すぎてついていけないときもあった。」と評価した。今回の受講生のうち大半が日本語中上級の学習者だったため、初級レベルの受講生が理解できるレベルを保ちつつ、中上級者が満足できる内容にするというのが担当教師の課題のひとつだった。

また、自由記述欄には「いつも楽しんで過ごす時間だった。学業や研究のストレスを発散することもできた。自然な日本語を学べた。」「みんなは自由に話したいことを話せる。コミュニケーションできることが嬉しかった。勉強するとき、新しい友達ができ、日本語を話すことで上達したと感

じる。役に立つ日本語をたくさん学べた。」「もっと話したい。先生といっぱいコミュニケーションしたい。」「授業はおもしろかった。新しい友達と日本での経験を共有することができた」といったコメントが寄せられた。アンケートに回答した受講生全員が研究と両立しながら約8割以上の出席率を維持したことからも、各々がM1クラスに意義を見出し継続して受講したことが分かる。但し、専門的な論文が日本語で読めたり、日本語での専門会議が分かるようになりたいという受講生の専門的日本語学習への期待には十分に込められなかった。

4. 今後に向けて

参加学生の満足度は高く、医療という現場ですぐに使用できる日本語の語彙や表現を学生に提供できたと言う点で、この試みは成功したと言える。授業の運営を「文型シラバス」「構造シラバス」ではなく「場面シラバス」「機能シラバス」に変えたことで、医学系の学生（特に大学院生）のニーズに近い授業を展開できた。一方で、様々な日本語レベルの学生が一つのクラスに参加し、日本語学習の内容も体系的ではないため、日本語自体を効果的、かつ適切に習得しているかどうかは不明である。ある学生にとっては日本語能力を伸ばす授業であったかもしれないし、別の学生にとっては「土台のない」中途半端な日本語を学ぶことになったかもしれない。

今後検討すべき点は、英語で研究活動をしている医学系の学生がどんな日本語を習得したいと思っているのかを知り、それに合致した教授法を考えていくことである。教師としてはどうしても基礎から体系的に日本語を習得した方がいい、プレイスメントテストをして適切な日本語レベルのクラスにまとめたい、と考えるが、それが学生の求めるもの、日本語学習の動機付けとなるもの、

学生たちにとって効果的な学習方法なのかを検討していく必要がある。もちろん、医学系学生と言っても、日本語学習者となる学生たちは多様で、それぞれ日本語学習の目的は異なるが、これまでの文型積み上げ式の授業では学生のニーズに合わなくなってきた事実を踏まえ、今回の取り組みをさらに効果的なものにしていきたいと考える。医学系日本語の教材には、日本での看護師・介護士の国家試験合格を目的に作成されたEPAの教材などが存在するが、内容が看護師・介護士に限定されている上、上級レベルの日本語が使用されている。そのため、大学で医学・薬学・栄養学等を学ぶ様々な日本語レベルの外国人留学生がEPAなどのために作成された日本語学習や専門領域の教科書や参考書を使って日本語を学習することは、あまり適切ではない。日本語学習に使う時間が限られ、研究室での会話や研究活動では英語が用いられる反面、教室外では日本語を使用し付属病院などで高度で専門的な日本語を聞く環境にいる学生たちに対して、どのような日本語教育ができるのか、さらに検討を加えていきたい。また、そのためのカリキュラムや教材の開発も進めていきたい。

参考資料

- 庵功雄 (2010) 『にほんごこれだけ! 1』 ココ出版
- 徳島大学国際センター (2018) 2017年度徳島大学国際センター紀要・年報
- 文化庁 (2013) 「日本語教育の推進に向けた基本的な考え方と論点の整理について (報告)」
- 水野良太郎 (2014) 『オノマトペラペラ：マンガで日本語の擬音語擬態語』 東京堂出版

参考ホームページ

- “多言語医療問診票” NPO 法人国際交流ハーティ港南台／公益財団法人かながわ国際交流財団
[<http://www.kifjp.org/medical/index.html>] 2019年2月20日アクセス

3. 病気の表現 (1) Phrases for Illnesses

言葉と意味を確認しましょう。

日本語	英語
せき (seki)	to cough
くしゃみ (kusyami)	to give a sneeze
はなみず (hanamizu)	One's nose is running.
ねつ熱 (netsu)	to have a fever
ち血 (chi)	to bleed
しっしん (shisshinn)	to have a rash
じんましん (jinmashin)	to get hives
あたま頭 (atama)	to have a headache
おなか (onaka)	to have a stomachache
のど喉 (nodo)	to have a sore throat
は歯 (ha)	to have a toothache
めまい (memai)	to feel dizzy
はげ吐き気 (hakike)	to feel like vomiting
さむけ寒気 (samuke)	to catch a chill
からだ体 (karada)	to feel heavy body

学習のヒント：日本語を話す人は、まず日本語の言葉をゆっくりと、イントネーションに気をつけて発音してあげましょう。それから、日本語学習者にリピートしてもらいます。体の部分を指しながら、一緒に体を動かして練習すると、体操のようになって楽しくできます。それから、逆のパターンで、英語の発音も練習しましょう。

覚えた言葉を練習しましょう。ペアになって、一人の人が病気の症状を指で指してください。もう一人の人が日本語か英語で答えてください。Make a pair with your friend. One person points a picture showing symptom of illness below, and another person answers it in Japanese or English.



学習のヒント：まず日本語を話す人が指で指して、日本語学習者に日本語でその言葉を言ってもらいます。次に、日本語学習者に指で指してもらって、日本語を話す人が英語で言ってみましょう。

文を作ろう Make sentences.



せき (seki)		I cough.
はなみず (hanamizu)	が 出る (ga deru)	My nose is running.
じんましん (jinmashin)		I get hives
あたま (atama)		I have a headache
おなか (onaka)	が 痛い (ga itai)	I have a stomachache
のど (nodo)		I have a sore throat
は歯 (ha)		I have a toothache.
めまい (memai)		I feel dizzy
はげ吐き気 (hakike)	が する (ga suru)	I feel like vomiting
さむけ寒気 (samuke)		I catch a chill
からだ体 (karada)	が だるい (ga darui)	I feel heavy body

会話：一人が医者になり、もう一人が患者になってください。患者は症状を言ってください。One person is a doctor, and the other is a patient. The patient tells the doctor about his/her symptom of the illness.



学習のヒント：医者と患者になったつもりで、病気の症状を話してみよう。一通りやったら、役割を交代してやってみてください。日本語でのやりとりが終わったら、今度は英語でやってみましょう。